TADOKU JUNIOR 自然のふしぎ神話 ★★★☆☆ ふつう 351語

The Swan Maidens

白鳥のむすめたち

Flora J. Cooke（1895年の本） 原文そのまま 朗読：Linette Geisel

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？ 金の車で毎日空をわたる王さまには、白鳥のように美しいむすめたちがいました。むすめたちは王さまの仕事を手つだいます。

ALONG, long time ago there was born in the east a wonderful king.

He was called “The King of the Golden Sword.”

Every day he came in his golden chariot scattering heat, light and happiness among his people.

Every day he passed from his palace in the east far over to his throne in the west.

He never missed a day for he wanted to see that everyone had a full share of his gifts.

Throughout the kingdom the birds sang and the flowers bloomed. The sky was full of beautiful pictures which were constantly changing.

The king had many daughters who were called swan maidens.

They were as graceful as swans and usually wore white featherlike dresses.

The swan maidens loved their good father and each one longed to help him in his work.

Sometimes the king saw that the grass was brown or the buds were not coming out.

Then he called the swan maidens to him and said, “My children, this must not be. There is nothing more beautiful in the kingdom than the green grass and the trees. They need your care.”

Gladly each maiden changed her dress and set out at once on her journey. Often they could not all work upon the grass and the buds.

Some of them ran off to play with the stones in the brook. The best ones went down to feed the roots and worms, and worked out of sight.

When their tasks were finished they always hurried back to their father, the king.

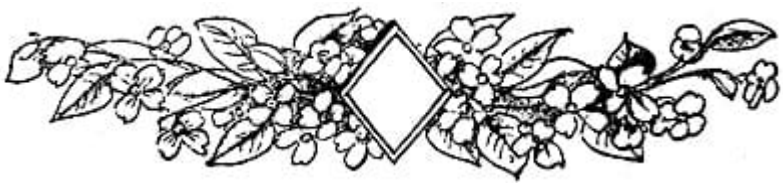
They went so noiselessly and swiftly that for a long time their way of travelling was a mystery.

In the fall, the king called the bravest swan maidens to him. He told them they must go away for a long time.

The swan maidens wrapped themselves in white, feathery blankets and came softly down to the shivering flowers.

Gently they placed a white spread on the earth and left no small seed uncovered.

At last, when the king smiled and their work was done, they stole away so softly and happily that no one missed them.



ずっと、ずっとむかし、東の国に、すばらしい王さまが生まれました。

王さまは「金のつるぎの王」とよばれていました。

王さまは毎日、金の車に乗ってやって来て、人々にねつと光としあわせをふりまきました。

王さまは毎日、東の宮でんから、ずっと西の王ざまで通っていきました。

一日も休みませんでした。だれもが、王さまのおくりものをじゅうぶんにもらっているか、見ておきたかったのです。

国じゅうで、鳥が歌い、花がさいていました。空は、たえず形をかえる美しい絵でいっぱいでした。

王さまには、白鳥のむすめとよばれる、たくさんのむすめがいました。

むすめたちは白鳥のように上品で、たいてい、羽のような白いドレスを着ていました。

白鳥のむすめたちは、やさしいお父さんが大すきで、だれもが王さまの仕事を手つだいたいと思っていました。

ときどき王さまは、草が茶色になっていたり、つぼみが開いていなかったりするのを見かけました。

すると王さまは、白鳥のむすめたちをよんで言いました。「むすめたちよ、これではいけない。国の中で、緑の草や木ほど美しいものはないのだ。草や木には、おまえたちのお世話がいるのだよ。」

むすめたちはよろこんで、それぞれドレスを着がえ、すぐに旅に出かけました。ときには、全員が草やつぼみの仕事をすることはできませんでした。

小川の石と遊びに、かけていってしまうむすめもいました。いちばんよいむすめたちは、地面の下へおりていって、根やミミズに食べ物をあげ、だれにも見えない所ではたらきました。

仕事がおわると、むすめたちはいつも、お父さんの王さまのところへ急いで帰りました。

むすめたちは音もなく、とても速く行き来したので、長いあいだ、どうやって旅をするのかはなぞでした。

秋になると、王さまは、いちばんゆうかんな白鳥のむすめたちをよびました。王さまはむすめたちに、長いあいだ遠くへ行かなければならないと言いました。

白鳥のむすめたちは、羽のような白いもうふに身をつつみ、寒さにふるえている花たちのところへ、そっとおりてきました。

むすめたちはやさしく、大地に白いしきものをかけ、小さなたね一つものこさずにおおいました。

とうとう王さまがほほえんで、むすめたちの仕事がおわると、むすめたちはとてもしずかに、楽しそうにそっと去っていったので、だれもいなくなったことに気がつきませんでした。

たんご と クイズ 白鳥のむすめたち

king 王さま	Sword つるぎ	swans 白鳥
grass 草	roots 根	worms ミミズ
seed たね		

Q1 白鳥のむすめたちは、ふだん何色のドレスを着ていた？

① 白　② 赤　③ 黒

Q2 草が茶色になっているのを見た王さまは、どうした？

① 自分で水をまいた　② 白鳥のむすめたちをよんで、お世話をたのんだ　③ 草を全部かりとった

Q3 いちばんよいむすめたちは、どこではたらいた？

① 空の上　② 小川の石の上　③ 地面の下

こたえ

Q1 ① むすめたちは白鳥のように上品で、たいてい羽のような白いドレスを着ていました。

Q2 ② 王さまは白鳥のむすめたちをよんで「草や木には、おまえたちのお世話がいる」と言い、手つだいをたのみました。

Q3 ③ いちばんよいむすめたちは地面の下へおりて、根やミミズに食べ物をあげ、見えない所ではたらきました。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #30800（Flora J. Cooke、1895年）。パブリックドメイン。
挿絵：(1895 edition)（同じ本の初版の挿絵。パブリックドメイン）
朗読（Web版）：Linette Geisel（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。